



Nov. | 2024
 沖縄開教本部通信
 vol. 114



ハイサイ 沖縄

「あちこーこー豆腐」

沖縄県工業技術センター 豊川哲也

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

今回から5回にわたって、沖縄の食文化について紹介させていただきます。

第一回は、豆腐です。たかが豆腐と言わないでください。沖縄県民は、県産豆腐をわざわざ「島豆腐」と呼んで愛しむくらいなんです。なんととっても、この島豆腐は、かの柳田国男に「野武士のごとき剛健なる豆腐である。華麗繊細なる都の絹ごしどもをして、面を伏せ気なえしむべし豆腐である」と言わせるほどの実力があるんですよ。

豆腐は中国伝来の食品で、日本には奈良時代に伝わり京都を拠点として全国に広まったようです。一方、沖縄には十四世紀ごろ、中国から直接伝わりました。そのため、日本の豆腐とは製造法や食べ方が違ってきます。本土の豆腐が、大豆を煮てすりつぶした後絞って豆乳を作るのに対し、島豆腐は生の大豆をすりつぶして豆乳を作ります。生の大豆を絞るので生絞り製法といわれます。生絞りは、熱を加えないので大豆臭やえぐみが少なくなるといわれています。

す。そして、豆乳に苦汁をうって箱に入れて固めると島豆腐の出来上がり。写真を見てください。

どうですか、この堂々たる存在感。島豆腐の一丁は約1kg、両手でやっと持てるほどの大きさです。これが、柳田のいう野武士のごとき豆腐なんです。

さて、豆腐ができたからと言ってボヤボヤしている暇はありません。

出来立ての熱々を配送に回します。島豆腐は鮮度が命、沖縄県民は温かい豆腐を偏愛しており、出来立ての熱々の島豆腐を「あちこーこー豆腐」と呼んで、さらに別格の扱いをしているんです。

スーパードでは、配送時間にあわせて豆腐を買いに来る方も多く、熱々であることを触って確認したあと、嬉しそうに購入していく姿が見られます。

さあ、持ち帰って「あちこーこー豆腐」を食べてみましょう。湯気の立つ豆腐を皿に乗せ箸をいれると押し返してくる弾力。そこ



島豆腐

を負けじと突き崩し一片を口に放り込む。豆腐を噛み割ると、大豆の甘味があり、それを塩気が引き締める。そして広がるうま味。そこには一片の苦味やえぐみもありません。飲み込むと大豆の甘い香りが喉の奥から立ち上ってきます。この満足感！

本誌をお読みの皆さん、申し訳ありませんが「あちこーこー豆腐」は沖縄でしか食べられません。沖縄にいらっしやっただ際には是非「あちこーこー豆腐」をお試しください。

「沖縄のお盆」

沖縄のお盆は毎年、旧暦の七月十三日から三日間で行われる。二〇二四年は八月十六日、十七日、十八日の三日間となった。別院にお骨や位牌を預けられる方は年々増え、今年もまたたくさんのご家族がお参りに来られた。

特に初日と三日目には約十七組の家族が参詣され、場所や時間を区切ったの対

沖縄は今!

「県の訴え 不適法」

宜野湾市にある、米軍普天間飛行場移設に伴う、名護市辺野古の新基地建設の軟弱地盤の改良について、沖縄防衛局が出した設計変更申請を巡り、県の不承認処分を取り消した国土交通相の裁決は違法だとして、県は処分の効力回復を求めていた。これについて、抗告訴訟の控訴審判決で福岡高裁那覇支部は9月2日、一審那覇地裁判決を支持し、県の訴えを「不適法で

応となったが、法名軸や位牌の前で香を焚き、お供え物を家族で食べながら一家団欒するという、沖縄風のお盆参りの風景があった。ちなみに、沖縄では一般的に、お盆の初日をウンケー（お迎え）、二日目をナカヌヒ（中日）、三日目をウークイ（お送り）と呼ぶ風習がある。今は亡き人に感謝し、共にあるというところが表されているのかもしれない。

却下すべきもの」と棄却した。

県はこれまで、辺野古新基地の是非を地方自治の観点から繰り返し問うてきたが、実質的な審理に入ったものはほとんどなく、県にとつて、門前払い判決が多く、厳しい判断が続いている。

国は、昨年末に設計変更申請を県に代わって承認する「代執行」を行い、今年一月には大浦湾側の工事を始めている。

玉城デニー知事は、「裁判所には、憲法の保障する地方自治体の本旨を踏まえ

表面の記事の寄稿者



氏名： 豊川 哲也
所属： 沖縄県工業技術センター

自己紹介：公設試験研究機関の一員として県内企業の食品開発のお手伝いをさせていただいています。沖縄の食品は近隣諸国の文化の影響をうけてとても多様です。そうした伝統食品を現代生活に活かせるような開発ができたらと思っています。



現在も工事が続く辺野古

た公平・中立な判決を期待していただけに、極めて残念だ」とコメントしたり、辺野古周辺の住民からは、「国は司法の場で、正々堂々と議論をしてほしい」との批判もあがっている。

「万国津梁」

仲西 朋子

沖縄県浦添市在住
石川県小松市出身



「子どもたちは沖縄で育てよう」と大阪から夫の故郷に引っ越して来て早十七年。小さかった子どもたちも一人二人と巣立ち、下の子たちも少し手がからなくなってきた今年、一念発起して得度することになりました。これまでお世話になってきた沖縄別院でこれからどんなお仕事ができるのか、どんな出遇いが待っているのか、楽しみにしながら別院のお掃除に励んでいます。

「万国津梁」という言葉を教えてくれたのは大学の友人。サミットが開かれてからまだ一年のピカピカだった万国津梁館へ連れて行ってもらったときでした。世界の架け橋として貿易で栄えた琉球王国を表す言葉で、深く仏教に帰依していたという尚泰久王が一四五八年に鑄造させた万国津梁の鐘に刻まれています。沖縄戦で消失・破壊された文化財も多い中、現在でも残っている貴重な国指定の重要文化財です。

梵鐘に刻まれた銘文の後半には仏教の興隆が謳われています（現在は沖縄県立博物館の常設展示室で見ることができます）。知らない世界を直接知りたい、学びたいと外国語を学んできた私にとつて、沖縄はまさに「めずらしい宝が国内に充ち満ちている」と銘文に刻まれている通り、南米やハワイからの日系の方や南洋帰りの方、また家族や親戚が海外に暮らしている方、そしてもちろん米軍基地で働くアメリカ人にも出遇う機会が多くあります。先日は沖縄別院でハンセン病回復者の方とご一緒して映画鑑賞もさせていただきました。

万国津梁の精神で様々な世界の架け橋となれるように、世のなか安穏なれ、仏法ひろまれと願いつつ、皆さんと共に学ばせていただきたく存じます。どうぞよろしくお願いたします。